

# ほんだな

## 本

書はとても美しい本である  
 と思う。著者の一人である  
 國森康弘くにもりやすひろのカメラから切り取ら  
 れた永源寺の人々の顔、生き様、  
 死に様。永源寺の人々との関わり  
 のなかで「命のバトン」を受け取  
 り、白衣を脱いで患者に接する医  
 師となってゆく「一人称の登場人  
 物」として描かれているもう一人  
 の著者、花戸貴司はなとたかし。本書は、地  
 域のなかで生きる、死ぬことの何  
 たるかを、人々の美意識にはたら  
 きかける方法で、いきなり説得し  
 てくる本である。文章中には政策  
 論的な記述もあつたりするが、こ  
 の美的な部分こそが本書の中心で  
 ある以上、読者は本書に説得され  
 るかどうか、ご自身で試してい  
 たくのがいちばんよいと思う。

や「死に方」を教えようとしてい  
 ないからだろう。本書は、永源寺  
 の人々なりの「生き方」や「死に  
 方」があるということ、読者に  
 示しているだけである。であれば  
 こそ、私たちは永源寺の人々の生  
 き様、死に様の魅力や意味を虚心  
 に感じることができるようになる。  
 もっとも、本書を読んで、羨  
 ましさを感じる読者もあるだろう。  
 というのも、永源寺の人々による  
 「命のバトン」の受け渡しは、農  
 村共同体的な人々のつながりのな  
 かでこそ実現しているものだから  
 である。読者の多くが居住する都  
 市部では、この地域的な共同性は  
 ほぼ失われてしまったものにほか  
 ならない。とするなら、もはや永  
 源寺の人々の営みは、憧れること  
 はできて手にもできないことのできな  
 い彼岸にあるのではないかと。  
 私は、「命のバトン」が地域で

受け渡されるとは、私たちの住む  
 地域に、その人生に興味をもつこ  
 とができる人を見つけることがで  
 きること、に尽きるように思  
 う。それさえできれば、「命のバ  
 トン」の受け渡しは、都市的な緩  
 やかな関係性のなかでも、可能と  
 なると思う（極端な話、私たちは  
 会ったこともない有名人の死から  
 「命のバトン」を受け取ることも  
 あるではないか）。とすれば、事  
 柄の本質は、やはり「命のバト

評者 猪飼周平（一橋大学大学院社会学研究科教授）

ン」を受け継ぐことそれ自体を私  
 たちが美しいと感じ、欲するかと  
 うかであろう。  
 本書の美を認めさえすれば、  
 あとはさほど難しくないかもしれ  
 ない。というのも、私たちはケア  
 する意思によって、地域包括ケア  
 を「命のバトン」の受け渡しを支  
 援するケアシステム、すなわち花  
 戸のいう「地域まるごとケア」に  
 することができるようである。

### ご飯が食べられなくなったら どうしますか？ —永源寺の地域まるごとケア

花戸 貴司 文  
 國森 康弘 写真  
 発行／農山漁村文化協会  
 ☎03-3585-1141  
 定価／本体1,800円（税別）

